

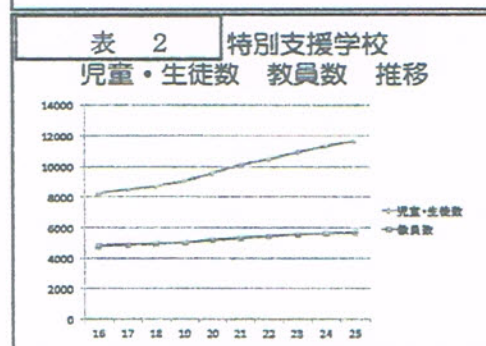
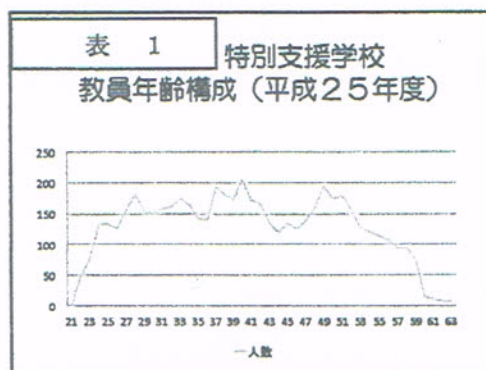
# 特別支援学校高等部の初任期教師の育成における現状と課題

鈴木 敏成（東京都立七生特別支援学校）

## 1 問題の所在

### (1) 若手教師の大量採用

大都市圏を中心に若手教師の急激な増加は、学校現場に多くの新たな課題を突きつけている。大都市圏のA県の特別支援学校の年齢別の教員構成は表1のようになっている。40代に若干の落ち込みがあるものの、各年齢層がバランスよく配置されており、若手教師の比率が極めて高くなるような事態は、ここ数年はおこらない事が予想される。しかし、表2にあるように、特別支援学校の児童・生徒数は10年間で急激に増えており、それに伴い教員数も平成16年度の4799名から平成25年度は5702名と2割近く増加している。教員の全体数の増加は、初任者の採用だけでなく他校種から異動してくる教員でまかなう事になり、特別支援教育の経験がなかったり、経験が少なかったりする教員が増えている。



また、これまで通常の学級や特別支援学級に在籍していた障害の程度が軽度な発達障害等の児童・生徒が特別支援学校に在籍する様になったため、教師には、これまで以上に多岐にわたる特別支援教育の専門性が求められる様になってきた。

さらに、キャリア教育や障害特性に応じた指導の充実、個別指導計画、個別の教育支援計画の活用、外部機関との連携等、さまざまな課題が特別支援学校の独自の課題として存在しており、これらの様々な課題に対応できる専門性をもつ若手教師の育成が喫緊の課題となっている。

### (2) 若手教師の授業づくりの現状

A 県では、採用後 1 年目の初任者研修から引き続いて 3 年目までの教師を対象にして悉皆研修を実施している。3 年間の悉皆の研修が終わった後、次の悉皆研修は 10 年経験者研修となる。その他に研修センターが実施する数多くあり、希望をすれば研修に参加する機会は多くある。しかし、学校を離れての研修となると、学校で中堅教員としての役割を期待されるこの時期の教員には参加しにくい現状もある。

初年度から 3 年次までの悉皆研修では、校内での研修として年間 3 回の研究授業を実施することが義務となっている。教師経験が浅い時期に、研究授業を行い、多くの先輩教師から様々なアドバイスを受ける事は、若手教師の成長にとって大きなプラスとなる。しかし、初任者の増加や多忙化の実態から、授業づくりへの支援が適切に行えない現状の学校もある。毎年多くの初任者が入ってくる特別支援学校では、毎年 5 名の初任者がいれば、初任者だけで年間 15 回、3 年次までの教師を合わせると、年間 45 回の研究授業が実施される事になる。だが、授業の空き時間がほとんどないような多忙の中で、管理職も含めて参観できる教師は限られており、参観できても短時間ということもある。更に研究授業をしても会議時間の確保のために協議会が実施できないこともある。また、研究授業の指導案は、ひな形にそって作成し、早い時期に提出することを求められる。そのため、形式の整った指導案を早めに提出する事に力を注ぐことになり、指導案作成が授業づくりの創意工夫のためのツールではなく、書類作成のようになってしまうこともある。このように適切な支援が受けられない中で、研究授業を数多く実施していくことが負担であると感じる若手教師は少なくない。

## 2 研究の目的

特別支援学校高等部における若手教師育成、特に授業づくりについての支援の在り方を、若手教師と先輩教師との関わりの事例から考察をする。

## 3 研究の方法

- ① 若手教師への授業づくりについてのアンケート調査
- ② 若手教師と指導教諭へのインタビュー調査

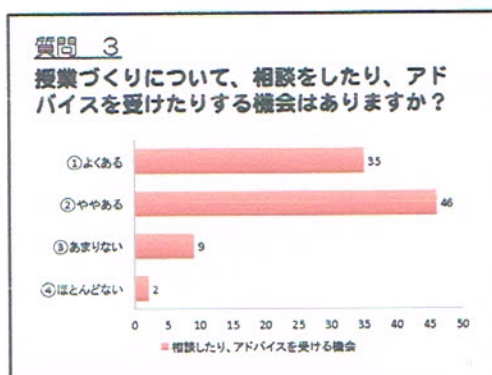
## 4 若手教師への授業づくりについてのアンケート調査の結果から



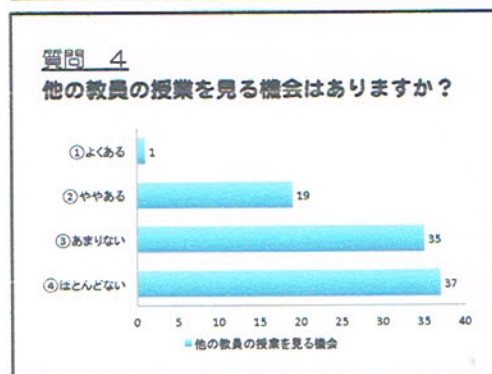
本アンケートは A 県特別支援学校の初任者 94 名に対して集合調査法により実施した。授業づくりを誰とどのように行っているか、今後どのように学んでいきたいか等について調査した。

その結果、94 名中 93 名が授業づくりについて悩みをもっていると答えている。どのような悩みをもっているかという質問では、「児童・生徒の実態把握」「教材の作成」「単元計画の作成」などについての悩みが多く挙げられていた。また、高等部の教師では、「専門外の教科への対応」についての悩みも多く出されていた。特別支援学校の高等部では専門教科の他に、他の教科も担当することが多くある。受け持つ教科は、教科「職業」や「情報」、「作業学習」など、進路指導に直結する指導内容も多く、高等部教員としての経験や専門性が必要とされる内容が多い。しかし、初任者が担当となってしまう事がよくあり、他の教師から学ぶ機会もほとんどなく授業を作っていくかなければならず、授業づくりに苦慮している。

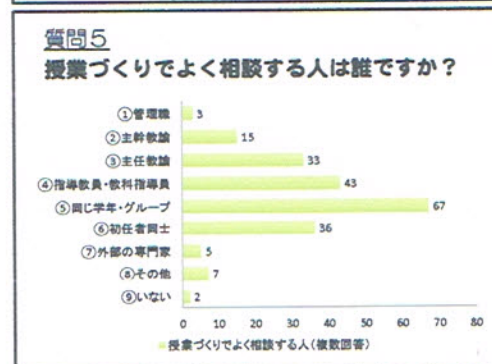
**質問 3** では、授業づくりについて相談をしたり、アドバイスを受けたりする機会について尋ねた。「よくある」「ややある」との回答が多かった。多くの若手教師が授業に悩みながらも、相談できる機会は比較的多くもっている。



**質問 4** では他の教師の授業を見る機会について尋ねた。他の教師の授業を見る機会は、「あまりない」「ほとんどない」との回答が多かった。初任者の校内研修として授業参観の機会を設けている学校もあるが、児童・生徒が学校に登校している間は、ほとんど教室から離れる事のできない特別支援学校の勤務の現状では、他の教師の授業を参観して学ぶ事が難しくなっている。

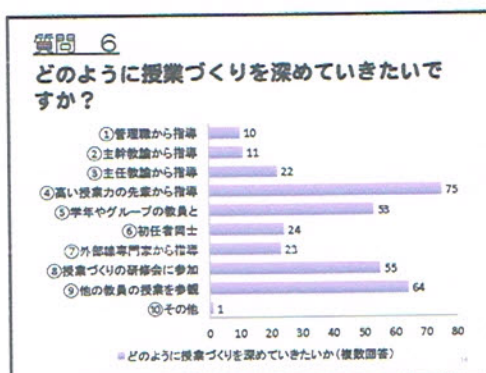


**質問 5** では、授業づくりでよく相談をする相手について尋ねた。最も多いのが「同じ学年、グループの教員」続いて「初任者研修の指導教員」「初任者同士」「主任教諭」となった。特別支援学校では、チームティーチングでの授業が多いため、同僚の教師



たちと話しやすい雰囲気ができていると考えられる。

**質問 6** では、どのように授業づくりを深めていきたいかについて尋ねた。「高い授業力の先輩に指導してもらいたい」という項目が最も多く、続いて「他の教師の授業を参観したい」「授業づくりの研修会に参加したい」「学年やグループの教員と学び合いたい」となった。



以上の結果から、特別支援学校の若手教師の授業づくりについてのニーズは、以下の様にまとめる事ができる。

- ① 授業づくりについてよく相談する相手は、先輩や同僚の教師たちであり、相談できる機会も比較的多い。
- ② 他の教師の授業を見る機会は少なく、参観したいと思っている教師が多い。
- ③ 今後は、先輩教師から指導してもらったり、研修会に参加したりして授業づくりを深めていきたいと思っている。

## 5 事例調査の結果から

### (1) 「OJT ミーティング」による若手教師育成の事例

#### ① 調査対象校の概要

A 特別支援学校は、小学部、中学部、高等部を併設し、児童・生徒数は250名程度（小学部100名程度、中学部60名程度、高等部90名程度）学級数50学級程度の大都市圏の特別支援学校としては比較的小規模な学校である。特に高等部は生徒数90名程度と小規模である。在校生の約半数が隣接する知的障害児の入所施設から通学している児童・生徒である。この入所施設は主に障害の程度が軽度な児童を受け入れており、そのため学校も軽度な発達障害等の児童・生徒の比率が他の知的障害特別支援学校に比べると高くなっている。

平成24年度に教育委員会よりOJT推進モデル校の指定を受け、OJTの推進に取り組んだ。OJTは、若手教師の授業力向上をねらいとして、若手教師1名に対して、3名程度の先輩教師がグループとなり、月に1回、1回30分の



設定で、「OJT ミーティング」を実施した。若手教師にとって身近な存在であり共に子ども達の指導にあたっている先輩教師からアドバイスを受ける有効な学習の機会となった。「OJT ミーティング」では、実施後に若手教師か先輩教師のいずれかが「OJT シート」に簡単な記録を記入していき、1年間の検討の成果が一目で分かる様にしていった。実施後のアンケートでは、全ての若手教師が「生徒を適切に理解して、学習課題を設定できるようになった」「教材についての理解が深まり、教材を開発できるようになった」と答えており、「OJT ミーティング」を通じて授業づくりを深める事ができた。

## ② 若手教師育成の事例

後藤教諭は（仮名）平成24年4月に初任者として高等部に配属になり、1年生の担任となった。専門教科は保健体育である。初年度の平成24年度は、保健体育と情報の授業をメインティーチャーとして担当した。保健体育の授業は、経験豊かなベテラン教師がサブティーチャーで授業に入りサポートをした。しかし情報の授業については専門外であり、全く初めての経験であるため、授業づくりに戸惑いと不安を多く抱えていた。そこで「OJT ミーティング」では、情報教育の経験が豊富な先輩教師とグループになり、授業づくりについて検討した。後藤教諭は年度当初、パソコンのキーボード操作を生徒に覚えさせることを主眼に授業をしようと考えていた。しかし、「OJT ミーティング」での検討や、先輩教師の授業を参観することを通して、パソコンを操作する技術を身につける事が大切なのではなく、身の周りにある様々な活用情報機器を、生活を豊かにする観点から活用できるようにする事が大切であると思う様になり、授業を改善していった。知的障害特別支援学校の生徒は、高等部卒業後すぐに企業経の就労もしくは福祉的な就労をして働く。また、グループホームなどでの共同生活をする卒業生も多い。「働いてお金を稼ぎ、自分で生活をする」ことは生徒達の大きな夢である。夢の実現のために、自分でできる事を学校生活の中で増やし、卒業後の生活の中で活かせる様にしていく事は、特別支援学校の大切な役割である。

3年目となった平成26年度、後藤教諭は3年生の担任となり、分掌は進路指導を担当し多忙な日々を過している。平成26年の9月に実施したインタビューでは、これまでのOJTを振り返り、昨年度担当した数学の授業づくりについて「去年はスタートの時点で1年目の情報の考え方があったせいか、数学で、高等部だからお金を無理矢理にやって教え込むのではなく、その子達の生活で活かせる数学って何だろうって私の中で考えて、やってきました」と述べており、OJTの成果を次年度の授業づくりに反映させることができていた。また、授業づくりについて「常に自分の授業を振り返って改善するという習慣はな



くしたくないなっているのがあるし、年次が上がるにつれて、仕事も増えてい  
ますけど、一番は授業だよっていうのを自分の中に忘れないで、それが難しい時期  
っていうのもあるんですけど、そこは甘えないで・・・そこは譲れない所だってい  
うのはやっていかななくちゃいけないと思っています。」と述べており、自分の授業  
を省察し、改善していく姿勢を持ち続けている。現在は高等部内には3名の  
年下の教員がいる。また年齢は上でも経験の少ない教師もいる。授業につい  
ていろいろと気付く事も多くなってきたので、少し自分からも周りの若手に  
伝えるようにしていきたいと思っている。

## (2) 指導教諭による若手教師育成の事例

### ① 調査対象校の概要

B 特別支援学校は、小学部、中学部、高等部を併設し、児童・生徒数は380名程度（小学部90名程度、中学部80名程度、高等部210名程度）学級数65学級程度の知的障害単独の特別支援学校としては規模の大きい学校である。特に高等部の生徒数は、平成16年度の96名から平成26年度は200名以上と10年間で倍以上に増加している。県西部の広範囲を学区としており、学区内には入所施設等もあり、さまざま障害の状態や生活背景の児童・生徒が在籍している。平成25年度には教育委員会のOJT推進モデル校の指定を受け、「指導教諭を活用したOJT」をテーマにOJTを推進した。また、以前から作業学習について指導教諭を中心として意欲的に取り組んでおり、授業改善を重ねてきた。

### ② 若手教師育成の事例

角田教諭（仮名）は、平成18年度に小学校からB 特別支援学校へ異動をしてきた。初めての特別支援学校高等部で、戸惑う事も多くあり、担当となった作業学習の窯業班（陶芸）については、知識も経験もなく、手探りの状態でのスタートとなった。専門教科外の教科を担当する事は特別支援学校高等部ではよくあることである。作業学習では、均一で品質の高いものを大量に生産し販売することを通じて、生徒は働く事の大切さや充実感を学ぶ。しかし、当時の授業で作っていた製品は、「作品の域を越えない感じ」であり、品質も生産量も販売をするには不十分な状態であった。

佐藤指導教諭は角田教諭と同じ年に、他の特別支援学校より異動をしてきた。佐藤指導教諭は前任校において作業学習の研究を推進してきた。特に自助具を用いて生徒の主体性を引き出す授業づくりでは、先進例となる実践を行ってきた。当初、佐藤指導教諭は作業学習の木工班を担当し、角田教諭は窯業班を担当していた。担当授業が同じ時間に行われるため、角田教諭が佐



藤指導教諭の授業から学ぶ機会はあまりなかった。しかし、生徒下校後の作業学習の準備や片付けの時に佐藤指導教諭が来てくれて様々なアドバイスを受けたり、佐藤指導教諭の研修会での話を聞いたりする事で、作業学習に対する考え方が変わっていった。自助具をつかって生徒がより主体的に参加する授業ができるようになり、製品の品質も向上し、均一な製品が量産できる様になった。また2年間、佐藤指導教諭が担当している作業学習に角田教諭がサブティーチャーとして入ることができ、佐藤指導教諭の授業づくりを間近で学ぶ事ができた。

佐藤指導教諭は、若手教師への支援の在り方について以下の様に述べている。

「子どもへの思いだとかというところを全面にだしていける、語っていける」ところが大切なのかなって思います。それがあつた上で、それぞれが担当する授業の深い考えとか、そういうのがあるって、技術だけが先走ってはいけませんね。それを支える思いがなきゃいけないし、そっちの方が逆に大事だったり、そう思いますね。」佐藤指導教諭の授業を見ると、若手教師達は、自助具のすばらしさに目がいてしまいがちである。しかし、その自助具の裏にある子どもへの思いが大切で、それをしっかり伝え続けていきたいと話している。

角田教諭は、今年B特別支援学校からC特別支援学校へ異動になった。C特別支援学校でも作業学習窯業班を担当しており、佐藤指導教諭から学んだ授業づくりを広げていきたいと考えている。そのために、3年目の若手教師に佐藤指導教諭の公開授業への参加を勧めた。その思いについて以下の様に話している。

「若くて、経験が浅くても吸収力のある若手の人に作業学習ってこういうものを本当は目指しているところなんだよということを知ってもらう面でも、ちょっと行ってもらってよかったなって。帰ってきてからも『あ、そうだったんですね』という感想を受けたりとか『すごくよかったです』っていってもらえたんで・・・“暖簾分け”じゃないですけど・・・伝えていくというか、広げていきたいなっているのはあります。」

先輩教師に支えられ成長した教師が、次の世代の若手教師へ授業づくりを伝承していつている。

## 6 考察と課題

後藤教諭は初任者として、全てが初めての経験の中で、専門教科ではない「情報」の授業を担当する事となった。先輩教師達と共に授業づくりをしていく中で「生活に活かせる力」を身につける事が特別支援学校では大切であ



る事に気づき、自分の授業を省察し改善していこうとする意欲をもち続けたいと思うようになった。また、角田教諭は初めて経験する特別支援学校高等部の作業学習で、優れた授業力をもった先輩教師と出会い、話を聞き、実際に共に授業をする中で、生徒への思いを大切に、生徒が主体的に活動することのために自助具を使い、均一な製品の量産できる授業へと改善していった。更に転勤先の学校でも、その授業づくりを若手教師に伝えている。この2つの事例から、若手教師の成長にとって、寄り添いながら成長を支えていく先輩教師の存在が重要であることが改めて見えてきた。研究授業を数多く実施しても、どのように授業を改善していけばよいのか分からなければ、授業づくりを深めていくことはできない。身近に相談できたり、実際の授業を見て学ぶ事ができたりする先輩教師がいる事で、2名の教師は大きく成長し続けている。

今日、教師間の同僚性が薄れてきているといわれている。しかしアンケート調査からも明らかのように、若手教師達は授業づくりに悩み、先輩教師から多くの事を学びたいと思っている。特に、授業力の高い先輩教師からアドバイスを受けたいと思っている。多忙化の中で校務に目一杯になってしまい、授業づくりがおろそかになってしまうという声も聞かれる。しかし、教師にとって、授業づくりが一番大切であることはいうまでもない。教師という仕事、特に授業づくりは経験を通じて深めていくしかない部分が多くある。先輩教師は授業づくりの何が大切なのかをしっかりと言葉で伝え実践で見せ、若手教師はそこから学ぶという事は、以前は教師の間で日常的に行われてきた。今日の教師の同僚性の希薄化や多忙化の中で、このことをどのように若手教師育成のシステムに組み入れていくかは、学校の実態に応じて柔軟に検討していく事が重要である。特に特別支援学校の高等部では、専門外の教科を担当することが多かったり、卒業後の生活を見据えて授業づくりをしなければならなかったりするなど、若手教師にとっては困難なことが多い。また、授業だけでなく、部活動の指導や進路指導などさまざまな業務をこなさなければならず、とても多忙な現状がある。そのような現状の中で、効果的に先輩教師から若手教師が学ぶ機会をいかに確保するのかは、学校経営上の大きな課題である。

## 参考文献等

- (1) 佐藤学 「教師花伝書-専門家として成長するために」 小学館 2009年
- (2) 中央教育審議会 「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」 2012年